

作成日	2019年7月1日
学科・専攻名	英文学科

## 教育課程・学習成果

### 1. 教育課程編成・実施の方針に基づき、各学位課程にふさわしい授業科目を開設し、教育課程を体系的に編成していますか。

#### 【現状説明】

教育課程編成・実施の方針に基づき、広く英語学および英語圏の文化・文学・コミュニケーションについての知見を修得するとともに、実用的な英語力を身につけることができるよう、各科目の関係・順次性を明示した体系的な教育課程を編成し実施している。1年次では、英語学および英語圏の文化・文学・コミュニケーション全般にわたる基礎的な科目を学ぶとともに、必修のゼミ Basic Research Seminar において英語での論文執筆およびプレゼンテーション作成を実際に体験させている。2年次からは、英米文学研究、英語文法語法研究、日英語対照研究など幅広い英語学および英語圏の文化・文学・コミュニケーションの領域について学べるよう、相互に関連する授業科目が配置されている。3年次からは Advanced Research Seminar など、本格的なゼミが始まり、それまでの学習を総合して、指導教員の個別指導を受けつつ、4年次にかけて卒業研究の完成を目指すという、体系的な編成となっている。実用的な英語力については、1・2年次に TOEFL および TOEIC 関連科目を重点的に配置するほか、3年次に Advanced Communications などの科目を配し、段階的なレベルアップを図っている。また、学科のポリシーと授業科目との関係については、カリキュラム・マップや履修モデルなどを通じて解説している。

#### 【成果および向上施策】※無い場合は「特筆すべき事項なし」と記入。

特記すべき事項なし。

#### 【課題および改善施策】※無い場合は「特筆すべき事項なし」と記入。

特記すべき事項なし。

### 2. 学生の学習を活性化し、効果的に教育を行うための措置を講じていますか。

#### 【現状説明】

本学科では、全年次において1クラス20人以下の少人数演習科目を必修科目として配置し、卒業までの継続的なゼミ指導により、英語の4技能のほか、自分で考える力および発表する力などの養成に注力している。また、1年次の Basic Research Seminar では、大学での学びの基礎となるアカデミック・スキルの習得を目的として、共通テキスト「アカデミック・スキル」も活用して初年次教育の充実を図っている。その他、多数の履修登録者がいる科目では、同一科目を複数コマ開講することで適正規模による授業運営に努め、講義科目においてもグループワークやコメントシートを活用したフィードバックなどのアクティブ・ラーニングを取り入れ、学生の主体的参加を促すよう工夫しているほか、専門科目への導入としては、1年次に上述の Basic Research Seminar の他、英語学基礎講義・イギリス文学基礎講義・アメリカ文学基礎講義・異文化理解基礎講義を開講し、アカデミック・スキルも踏まえ、学生が円滑に専門科目に取り組めるように配慮している。

#### 【成果および向上施策】※無い場合は「特筆すべき事項なし」と記入。

特筆すべき事項なし。

#### 【課題および改善施策】※無い場合は「特筆すべき事項なし」と記入。

特筆すべき事項なし。

**3. 学生の学修成果を把握し、教育課程及びその内容、方法の適切性についての点検・評価を行っていますか。また、その結果をもとに教育の質向上に向けた取り組みを行っていますか。**

**【現状説明】**

教育課程及びその内容、方法の適切性については、学科会議において、授業評価アンケートや学生生活実態調査、卒業時満足度調査の結果から検証している。また 2～4 回生において受験を義務づけている TOEIC 試験の結果を学科会議で検討し、学修効果を確認するとともに、カリキュラム改革などの議論に活用している。また、毎年度、次年度の時間割作成の際に、各科目受講者数の確認、カリキュラムの妥当性、担当者の妥当性などを学科会議で検証している。また、原則 4 年に 1 度実施されるカリキュラム改革において、教務委員会あるいはワーキンググループで全学的な観点からも検証している。

その他の改善に結びつける取り組みとしては、全学の FD 講演会、学科内の FD 研究会（教員によるグループワークなど）、FD 交流会（事例発表）、公開授業への参加、学外の FD 関連研修・講演会への個別参加などを通して行っている。

**【成果および向上施策】※無い場合は「特筆すべき事項なし」と記入。**

特筆すべき事項なし。

**【課題および改善施策】※無い場合は「特筆すべき事項なし」と記入。**

授業評価アンケートについては、各教員はアンケート結果に対する「授業評価所見」を公表しているが、個人での検証に留まっております。学科として組織的な検証に取り組むことが課題である。2018 年度学生生活実態調査結果では、カリキュラムや講義内容についての満足度（P182、194）が他学科と比べてやや低い数値となっているため、授業アンケート結果と組み合わせ検証し、今後のカリキュラムの改革に活かす予定である。

**教員・教員組織、FD**

**1. 教員組織の編成（募集・採用・昇任など）にあたって、職位構成および年齢構成の偏りに配慮した編成をおこなっていますか。また、カリキュラムに基づく教員組織となっていますか。**

**【現状説明】**

教員組織のバランスについて、13 人中、60 歳代が 3 人（23.0%）、50 歳代が 6 人（46.2%）、40 歳代が 4 人（30.8%）、教授が 8 人（61.5%）、准教授が 5 人（38.5%）であり、全体としてバランスの取れた編成となっている。非常勤講師依存率については、2019 年度から実施の新カリキュラムにおいて科目の削減・整理を行い、要請通りの水準を実現することができた。

カリキュラムとの関連については、カリキュラム・ポリシーを踏まえ、英語学英米文学および異文化理解・英語教育で構成されるカリキュラムに対し、それぞれを研究分野とする教員を配置しており、カリキュラムと各研究分野が整合している。

**【成果および向上施策】※無い場合は「特筆すべき事項なし」と記入。**

特筆すべき事項なし。

**【課題および改善施策】※無い場合は「特筆すべき事項なし」と記入。**

特筆すべき事項なし。

**2. 学科・専攻独自の FD 活動を実施し、教員の資質向上に取り組んでいますか。**

**【現状説明】**

2018 年度は学科独自 FD として、TOEIC 演習および TOEFL 演習の担当者会議を開き、授業の進め方、教科書の選定、評価方法などについて意見交換を行うとともに、複数クラス間の内容統一を図った。学科全体としては、新年度のシラバスチェックの機会を利用して、全教員が参加してシラバスの書き方や授業の進め方、評価方法について意見交換を行い、全体の統一を図った。

また、卒業論文の成績を決める学科会議において、各論文の長所・短所ならびに指導上の困難などについて意見交換を行い、各

教員の論文指導力の向上を図っている。

**【成果および向上施策】※無い場合は「特筆すべき事項なし」と記入。**

特筆すべき事項なし。

**【課題および改善施策】※無い場合は「特筆すべき事項なし」と記入。**

特筆すべき事項なし。

### 内部評価委員会からの評価結果（内部評価結果レポート）

一般的なコメント（総評）
問題点が的確に認識され、改善に向けた活動が推進されていると評価できます。
改善勧告コメント（具体的な改善の指示）
<ul style="list-style-type: none"><li>・「教育課程・学習成果」の3において、【現状説明】の記載内容の中に【課題および改善施策】に挙げるべきものが含まれているように思われます。整理して各項目に記述してください。</li><li>・「教員・教員組織、FD」の2の中に、「教員の資質向上」の観点を盛り込んでください。</li></ul>

### 内部評価結果レポートの改善勧告コメントに対する点検単位の意見

意見
<ul style="list-style-type: none"><li>・「教育課程・学習成果」の3【現状説明】の記載内容の一部を【課題および改善施策】に移動しました。</li><li>・「教員・教員組織、FD」の2の中に「また、～」以降の一文を加筆しました。</li></ul>